

広隆寺壙箱の製作法について

山 崎 隆 之

Yamazaki, Takayuki

はじめに

広隆寺壙箱は広隆寺上宮王院の本尊聖徳太子立像の像内にあったもので、中には太子ゆかりの寺々の遺物が納められていた。広隆寺聖徳太子像は天皇の即位ごとに特製の御袍を着装させる習わしがあり、平成6年の御袍御更衣の儀に先立って行われた応急修理の際に像内から元永3年(1120)の造立銘とともに上記の壙箱が発見された。(注1)

壙箱と命名されたのは本品が木製等でなく、布製であったため、奈良時代の壙、つまり脱活乾漆と同類とみなされたことによる。しかし本品の材質、技法、加飾法は他に例を見ない特異なもので、平安時代の漆芸の多彩さ、奥深さを示す重要な作例といえる。今回、その模造試作を行う中で、技法解明につながる体験を得たので、その成果を報告する。

形状と文様

壙箱は径11.1cm、高さ6.5cm、八花形の被蓋造で、蓋には塵居を設け、上面は甲盛りがある。口縁には下地を盛り上げて細縁をつくり、甲部では側面から立ち上がった花形間の入隅状の溝がそのまま伸びて中心で交叉、放射形の溝をなす。箱の外は金箔、内に銀箔が貼られ、外面には粒状に盛上がった文様が施される。蓋の表には梅、楓、竜胆を散らし、それらの合間に尾長の小鳥と蝶を配す。側面には梅と柳の折枝文が表され、身の側面にはこれらに松が加えられている。

材質と技法

(1) 器胎と原型

器胎の材質は白い布で、糸は比較的太く、織り目も粗い。(1cmに7本前後) 通例脱活

乾漆でも木製布着せでも麻布を用いるので本品も麻であろう。

X線写真には、蓋、身の口縁に並行に均一な布目が写っており、これに交錯するような斜めの布目は確認できない。このことから布は一層のみで、しかも、側面にテープ状の布を巻き、甲と底に別の布を貼ったことが分かる。一枚の大きな布でつくろうとすれば、布の四隅を引張って斜めの密な布目になるはずである。

原型は想像の域を出ないが、木型か土型で、雌型、雄型の両種が想定できる。雌型とすれば、布や紙を貼込んだ場合、乾燥時に器胎が縮んでしまうので、雄型を用いるのが順当であろう。本品の八花形の溝は鋭角的でなく、曲面状になっている。これは原型の溝部に貼られた布が乾燥して縮み、型から浮いた結果と思われる。原型の材質は離型を考慮すれば、土であろう。それも除去しやすい砂状の土である。器形から見ると、八花形の各寸法が一致しないなど、手作りの感じが強い。木型ならもっと正確な形が期待できるが、離型は困難となる。

布を貼る接着剤は脱活乾漆の場合、多くは麦漆または糊漆を用いるとされるが、本品の布には漆の染みが見られない。また、布はまだ柔軟性を保持しているようで、たとえば膠などで塗り固められた状態ではない。米糊、小麦粉糊、ふのり等が用いられたか。

上記のことから実験では型は砂状の鑄型土に少量の粘土汁を混ぜたもので雄型をつくり、これに麻布を貼った。

(2) 下地と漆塗

本品の下地は明るい灰色を呈し、中の布に漆の浸出はない。このことから、この下地は漆を含まない、いわゆる泥地であることが分かる。泥地は近世の仏像や漆芸品に用いられる粗悪なもので、平安時代の高級な漆芸品では異例といえる。

漆塗は普通の黒漆に比べてやや厚いことから当初は古代に使用された掃墨を混入した黒漆かと思われたが、プレパラートによる塗膜断層の観察の結果、下地面に黒色粉末を塗り、これに生漆を塗って黒色に見せる、いわば代用黒漆であることが判明した。(注2) 観察者の岡田文男氏によれば、これは平安時代の一技法で、鳥羽離宮から出土した黒漆の小片にも同様のものがあるという。ただし、本品の黒色粉末はカーボンすなわち掃墨でなく、鉱物質とのことである。

今回は下地としては細かい砥の粉を膠で作ったもの、黒色粉末は試験的に日本画顔料の緑青を焼いたものを用いた。

(3) 加飾

本品の加飾は一見金地蒔絵風だが、これも類例のない特殊な技法によっている。蒔絵と見える文様部は手擦れによって金が剥がれた箇所があり、そこに黒い粗粒が見られる。この黒色粉末は高蒔絵などの地上げに用いられる錫粉か炭粉で、色味からみて炭粉であろう。(注3) すなわち、文様を漆で描き、炭粉を蒔いて一段高くし、全面に金箔を押して文様部のみ浮き出るようにしたものである。

結果と考察

本品は布が一層で、しかも糊漆、麦漆を用いていないので材質が脆弱で、原型の除去は容易でなく、離型後にもゆがみが生じて不安定であった。糊漆を用いた試作では、これほどの困難さはなかった。原型も、除去しやすい脆いもの、ということで砂状の土を用いたが、布とのなじみが悪く、形も正確さを欠いた。この問題を回避するために離型前に布の表面に下地を付けたり、あるいは原型に直接内側の下地となるべき泥地を塗って、すぐに布を押し付け、さらに上から泥地を付けて塗り込む方法も試みた。結果は比較的良好であった。

しかし、いずれにせよこれらの方法は接着にも下地にも漆を用いる脱活乾漆に比べ、難度が高く、乾漆技法の便法、略法とは考えにくい。当時の漆工技術の中でも正統的でない特殊な例と見られよう。一方文様の表現は同時代の片輪車螺鈿蒔絵手箱(東京国立博物館)の内面や西本願寺三十六人歌集の料紙の地文に見られる文様と共通する格調の高いものである。ことによると絵師または絵を良くする貴頭が独自の工夫のもとに製作したものかも知れない。

ところで、本品が壙、つまり脱活乾漆の技法そのままでないとする壙箱と呼ぶのはふさわしくない。より実態に合った名称が提案されるべきである。一般に箱類の名称は文様、器形、材質技法、加飾法、用途などのいくつかを含むのが通例であり、本品は用途は不明ながら、文様としては花鳥文、器形としては八花形である。材質、技法について本品は当初に壙とされたが、この技法は奈良時代特有のもので、平安時代、とりわけ12世紀には断絶していたと思われる。この点について示唆を与えてくれるのは、『仁和寺御室御物実録』である。これは宇多上皇が仁和寺に納めた宝物の記録で、天曆4年(940)の筆録である。この中に、「蒔絵張篋」の記載がある。(注4) この「張」の意味は、のちの記録ではあるが、『阿不歳乃山陵記』で知ることができる。この記録は文曆2年(1235)に盗掘にあった天武天皇陵の内部の様子を記したもので、天皇の棺について「御棺張物也、以布張之、入角也 朱塗…」と乾漆棺であったことを明らかにしている。(注5) これにより、仁和

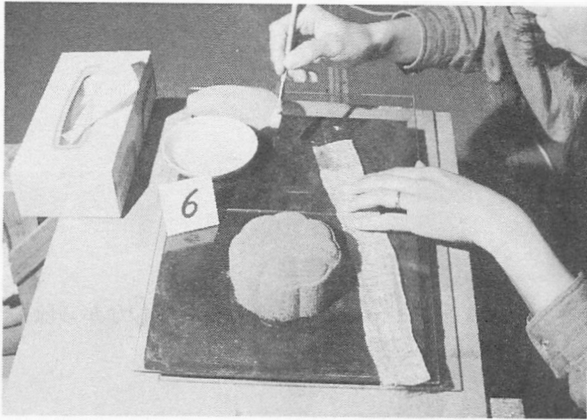
寺実録の「張筥」も布を貼り重ねてつくられたことが推察される。広隆寺壙箱も当時の呼び名にしたがえば張筥または張箱と称されるのが適当であろう。また加飾法についてはその表現効果からみれば金地蒔絵とするべきかも知れないが、漆工史上これが流行するのは鎌倉時代に入ってからであり、この名称を用いるのは躊躇される。正しくは擬似蒔絵とするべきか、とも思われるが、今のところは文様も含めて全面に金箔を押しているので、漆箱と仮称しておく。以上の点から、広隆寺「壙箱」の名称を「花鳥文漆箱張箱」とすることにしたい。

本稿の中核となる製作実験は、平成9年度のメトロポリタン東洋美術研究センターの研究助成を受けて実施した。各種の実験は本学卒業生小山久美子を中心となって行った。

なお、本研究に際しては広隆寺貫主清瀧智弘師の御高配をいただいた。また、漆芸家北村昭斎氏、関西大学教授高橋隆博氏、京都造形大学助教授岡田文男氏からも御教示をいただいた。記して謝意を表す。

注

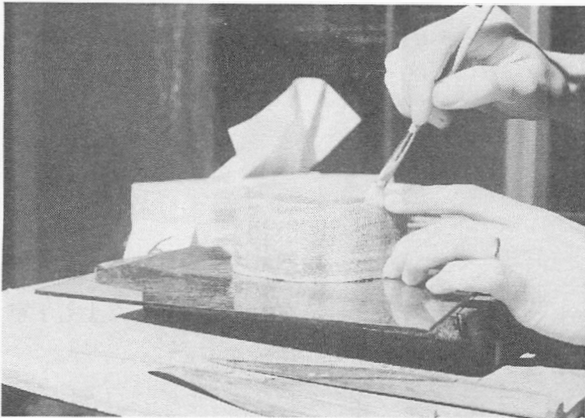
1. 『広隆寺上宮王院 聖徳太子像 (1997年 京都大学学術出版会)』の中で本品について概要を報告した。(拙稿「納入壙箱について」)
2. 広隆寺の御了解を得て、剥落小片の中から2mm×1mm程度の微細な小片の提供を受け、京都造形大学岡田文男氏に依頼してプレパラートを作成、その結果は写真とともに前記報告書に発表済み。
3. 漆芸家、漆工修復家北村昭斎氏の観察による。
4. 『続々群書類従』第16、136頁記載。この記事の存在は『手箱』(1996年 巖々堂)中の「筥・櫛筥・手筥—手筥の成立をめぐる」(高橋隆博)によって知った。
5. 『古代の技術』(小林行雄 1962年 塙書房)131頁に夾紵(脱活乾漆)としてとり上げられている。また実際に牽牛子塚出土といわれる、麻布を三十層以上貼り重ねた乾漆棺の断片も現存している。



製作工程

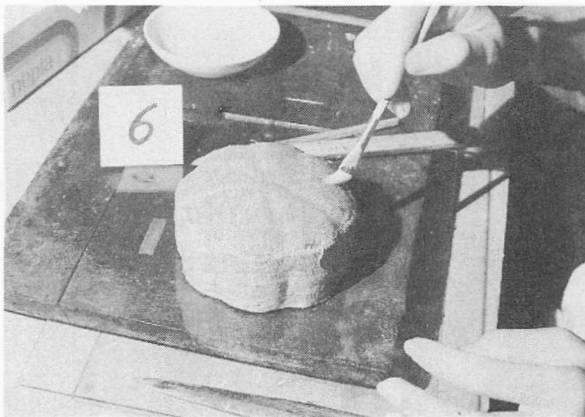
布着せ

铸物土でつくった原型に麻布を糊液（この場合はふのり）で貼る。



布着せ

布の上からも糊液を塗って布を型に密着させる。



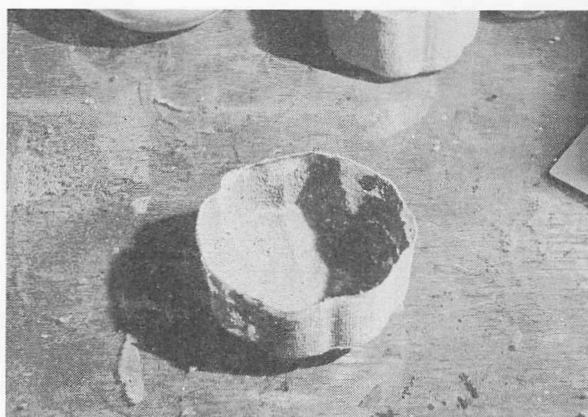
布着せ

甲には別の布を貼り、継目を重ねる。



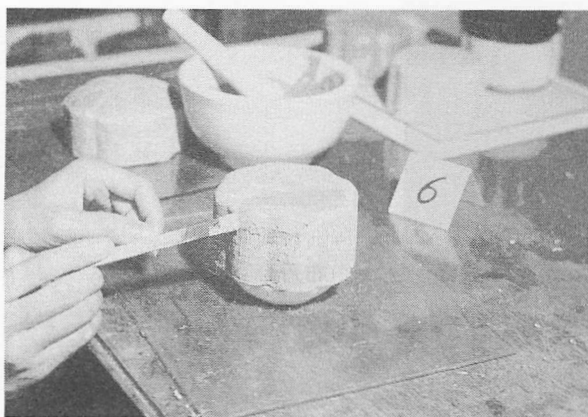
離型

原型の土を崩しながら除去する。



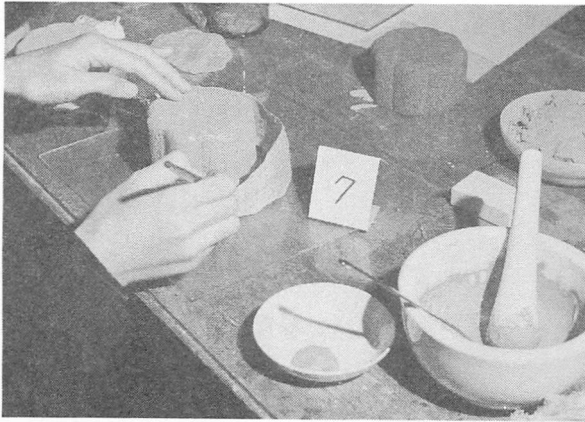
離型

布内面に付着した土も丁寧に除去する。



下地

布の内外に下地（泥地＝砥の粉を膠で練ったもの）を付け、表面を研いで仕上げる。



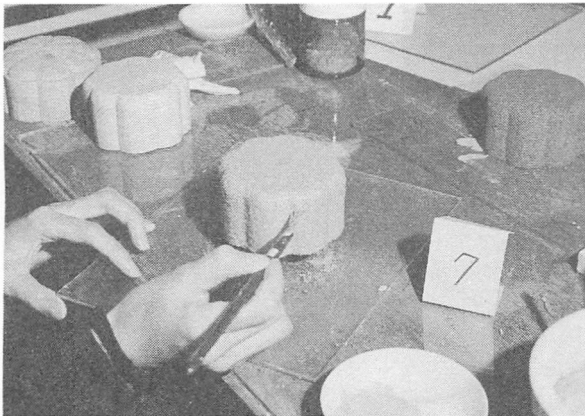
布着せ（別法）

糊を用いず原型にまず下地を塗って布を当てる。



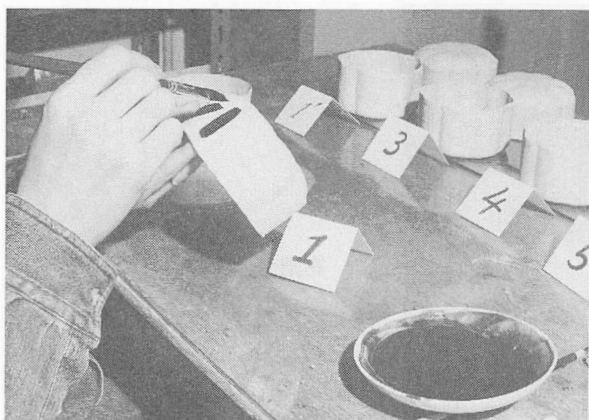
布着せ（別法）

布の外からも下地を塗って布を包み込む。



下地（別法）

離型前に表面の下地を付けて研ぐ。



漆塗

緑青を焼いてつくった黒色
粉を膠で溶いて塗る。



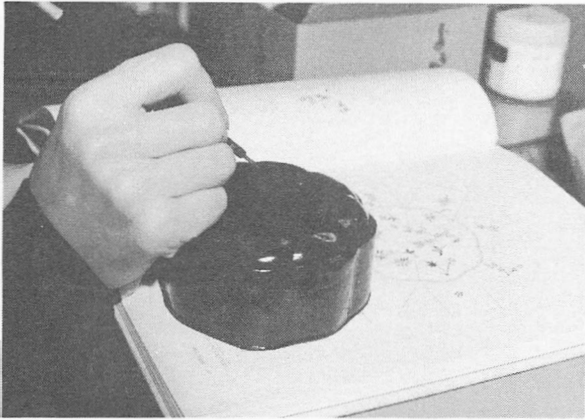
漆塗

内面にも焼緑青を塗る。



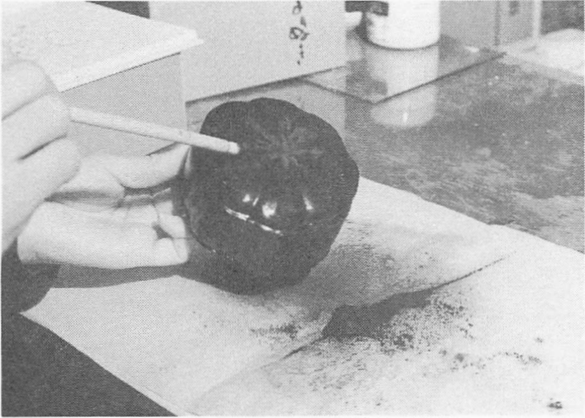
漆塗

さらに表面から生漆を塗る。



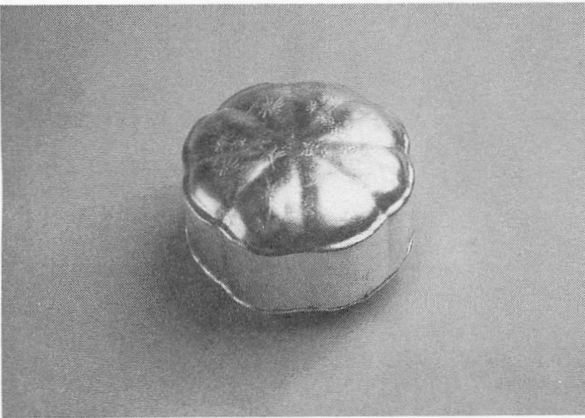
加飾

漆で文様を描く。



加飾

炭粉（木炭の粉末）を蒔いて文様を浮き出させる。



加飾

全面に金箔を押しして完成。